11月19日(日)

＼ドーンと一本!!穴子が!!／

穴子一本乗せ握り

1パック

1,000円(税込)

先週、惣菜担当城田さんとの会話の中で、私が「何か面白い広告できんですかね～?」と相談すると、「なんで見たんかな?なんか、酢飯3貫位並べてあってその上に煮穴子乗せてあってから、面白いな～って思ったわ!」と。

その5秒後、大きな煮穴子を仕入していたので、すぐ実施!考えるより行動と言い試みる私。すぐ横を見ると同じく楽しそうに見守る城田さん(笑)。

酢飯3貫はもの足らず6貫にし、煮穴子を乗せると…おっさん2人でOh!と小さめの歓声が(笑)。

いやいや食べて見よう!フォーク、ナイフ?ハサミ?とりあえず箸で穴子切って酢飯を巻くように食べると…「うわ、美味い!!」とまた歓声…。

いやいや、これ入れるトレーが無いでしょ!とふと見上げると、長ーいトレーがあるじゃん!!とまたまた歓声からの広告完成(笑)。

試しに5パック出すと直ぐに完売したので、よしこれで行こう!と言う事で、今回は『穴子一本乗せ握り～、下には6貫あるよ～』を販売致します。

穴子だけで食べるのも良し、巻いて食べても良し、お好みの食べ方で食べて下さい!本当に美味しい煮穴子なんです。価格はドーンと1000円!

ご来店お待ちしとります!!

西田鮮魚店　店長　祐宗　優司

ジョイフル

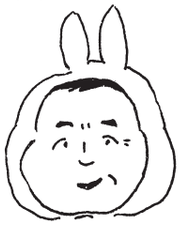
西田鮮魚店　☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489（旧庄原市内はご自宅に配達）

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『川北 こどもの夢 小中学校？』

鮮コーポレーション㈱　代表取締役会長　西田　昌史



川北に自由学校ができるらしい。

11月4日の土曜日、悦子と吉舎の『福六』へ行った。

一ヶ月ほど前、悦子が一枚のチケットを見せて「行かん？」と聞く。見ると『夢みる小学校』という映画。「行こうかぁ」。最近は、誘われたら、できるだけ断らないようにしている。彼女のネットワークに入ると、けっこう新鮮で楽しかったりするから。で、やっぱり行って良かった。

日彰館高校の近くにある『福六』。

今年の4月に、もとの吉舎郵便局と福六酒造をリニューアルしてオープンした吉舎の町の新しい拠点らしい。だからか、ナビに出なくて、不安なまま出発したが、どうにか辿りついた。二階建てのそれらしい雰囲気の建物だ。

入口の外に受付があり、見たことがある人が立っている。しばらくぶりで、わからなかった。じっと見てわかった。芥ちゃんだ。昔、JCで一緒だった。あいかわらずの人なつっこい笑顔。今はこの『福六』の館長らしい。

隣に立っていたのは栗原さん。この前まで、うちで仕事をしてくれていた。『すし辰三次店』のディスプレイは彼女の手によるものだ。いい仕事をする。毎回、お客様からおほめの言葉をいただいていた。今は『手づくり工房kuririn』を起業してがんばっている。栗原さんも久しぶり。

私が、芥ちゃんや栗原さんと話している間に、悦子はコーヒーを注文しに、先に『福六』の中へ。遅れて入る私。「おぉ、ええ雰囲気じゃ。」レトロな室内。そこに、和風の柄を繋ぎ合せたようなエキゾチックな椅子が一脚おかれている。カラフルでもありシックでもあるその椅子が目を引く。

コーヒーがなかなか出てこない。見ると、カウンターの中にはこだわりの珈琲屋さんのマスターそのものの男性が、一杯一杯、丁寧に淹れている。時間がかかるわけだ。テイクアウトだから紙コップ。それでもコーヒーじゃなくて珈琲といったほうがふさわしいくらいのこだわりだ。次に来るときは、店内で飲まなくては。その珈琲を手に、裏庭を通って案内されたのは20人も入れば、いっぱいという民家の和室。正面の壁にスクリーンが掛けられている。かろうじて空いていた正面の席に悦子と座る。

3時半。スクリーンの前に3名の見目麗しい女性が立った。栗原さんもその一人。そこに芥ちゃんが入ってきて開演の挨拶。そして、3人の女性と映像を操作する男性がひと言ずつ話す。

広島だったかで、この映画を見た彼女たちが感動。どうしても、この映画を見てほしいと思ったところから、自主上映のこの上映会が始まったらしい。

一時間半。

画面に映し出される映画のタイトルは『夢みる小学校』

いきなり、こどもたちが大工仕事？をしているシーンから始まった。

けっこう立派な二階建ての櫓だ。2メートルもある長い板を何人もで運び、のこぎりや電動ドリルを駆使して組み立てていく。嬉々として。大丈夫か？いらぬ心配が頭に浮かぶ。もちろん大丈夫だ。

驚いてはいけない。その設計もこどもたちがやっているのだ。ちゃんと寸法を計算しながら。大人（先生）は手を出さない。驚いてはいけないと言ったが驚いた。

見ながら、こどものころを思い出した。

昔は、多かれ少なかれ、こどもも家の手伝いをさせられていた。だから生活のなかで、たくさんのことを覚えていった。知識ではなく知恵が身についた。なんだろう。生きる力とでもいえばいいか。そんなたくましさが身についたようだ。

あのころ、川手の子は、農繁期になれば、昼からは家に帰っていた。残った本町の私たちは「ええのぅ、川手は」と言い合っていたような記憶がある。たぶん、こどもながらに、田植えや稲刈りの手伝いをしていたのだろう。こどもも労働力の一部だった。

自慢じゃないが私だって、小学3年のころから、姉といっしょに魚屋の店先で手伝いをしていた。というより、させられていた。

今でも思い出すことがある。当時、すでに日本もメートル法が採用されていたから、学校で習うのはグラムにキログラム。しかし、うちの店はまだ尺貫法で、秤は匁と貫目だった。100匁だとか1貫目で計算する自分は大人の世界にいるみたいで、周りのみんながこどもに見えたものだ（こどもなのだが）。まぁ、テストにはまるっきり役に立たなかったが。

こどもをなめてはいけない。こどもには生まれながらに持つ生きる力があるはず。豊かな社会に生きる私たちは、こどもを守るという大義名分の中で、こどもたちから、それを奪ってしまっているのではないか。

こどもの持つ力を信じ、見守り、やらせること。そうすることで、こどもは自分の力で成長していく。『夢みる小学校』はそれを実践する学校だ。

上映後、『広島に自由学校をつくる会』の中岡さんが登場。中岡さんは、私の娘が初めて保育士として働くようになった時の所長さんで、たいへんお世話になった。その時、保育士さんを『先生』と呼ばせない。『さん付け』で呼ぶのだと聞いた。なんと、変わったことをと戸惑った。しかし、中岡さんを知り、その深い思いを聞くうちに共鳴するようになった。「なるほどな」。

長い間お会いしてなかったが、70才を過ぎてなお、確固とした生き方は変わらない。尊敬する。今は、『学校法人　庄原こどもの夢学園設立発起人会　代表』だ。

その中岡さんが話し始めた。廃校となっている川北小学校の跡に新しい学校を創るのだと。そして今、あと一歩のところまで来ているのだと。映画を見た後だ。中岡さんのやりたいことが手に取るようにわかった。淡々と話されるその姿から、中岡さんの強い意志が伝わった。

『川北　こどもの夢　小中学校　はこんな学校です』というパンフレットの中にショッキングな言葉がある。映画の中で、それは何度も繰り返されているからもう驚かない。私は大賛成だ。

『先生がいない、テストがない、宿題がない、通信簿がない』

2025年小学校開校。2027年中学校開校。

庄原も捨てたもんじゃない。市をあげて応援しなければ！

きのくに子どもの村小学校

2023年11月19日